

震災と書店

——防災対策はどうなっているのか——

◆
湯浅俊彦

I 想像を超えた書店の被害

1995年1月17日に阪神・淡路地域を襲った大地震は未曾有の大災害をもたらした。書店にも大きな被害を与えた。駅ビルにあった書店が駅舎ごと全壊したのをはじめ、建物の倒壊・傾斜、棚倒壊、窓ガラス破損、商品散乱、スプリンクラー作動による水濡れなど、これまで思いもよらなかったような被害が広範囲にわたり発生したのである。

まさか関西で大地震が起こるとは思わなかった、というのが自ら神戸市内の自宅で被災した私の正直な思いだ。しかし、直下型大地震が実際に起こってしまった以上、これまで防火対策しかなかった書店の防災対策が根本的に見直されなければならないことは必然であろう。なぜなら顧客と従業員の安全確保は企業の社会的責務であり、とりわけ不特定多数の顧客が出入りし、また棚倒壊などによって重大な人的被害が予測できる書店では、今後できる限りの地震対策が講じられなければならないからである。

地震から1か月半ほどたった今年の3月6日、京阪神地域の書店員の勉強会であり、私が事務局をつとめる書店トーク会では、「阪神大震災と書店」をテーマに討論の機会をもった。そこでは被害状況の確認と今後の被災書店の復興対策とともに、防災対策についてもさまざまな意見が交わされた。本稿ではこの書店トーク会での討論をもとに私見を加え、五つのポイントに整理して書店における防災対策について検討してみたい。少しでも図書館の方々への参考になれば幸いである。

II 書店に必要な防災対策とは

1. 避難路の確保と顧客の誘導

阪神・淡路大震災では地震の発生時刻が午前5時46分だったからこそ、顧客や従業員の死者はなかったのだと言えよう。これがもし夕方であったとすれば大惨事につながったであろうことは容易に推測できる。しかし、書店における地震対策というものは少なくとも私が聞いた範囲では皆無であった。今後も例えば震度5クラスの地震でケガ人を出したのでは、書店の社会的責任が問われることになるだろう。書店においては出版物に対する愛着はもちろんのことだが、読者に対する責任感をもつことがもっとも重要であり、読者サービス以前の問題として書店店舗自体が安全な空間でなければならない。

そのためには緊急時における顧客の誘導対策がまず必要である。各非常口は十分なスペースが確保されていて常に開いている状態になっているかどうか。書店では往々にして入ったばかりの雑誌や新刊書籍を台車ごと従業員通路に置いていることがあり、また通路付近にある作業台が固定されずに置かれていたり、出口付近に窓ガラスがあるところもある。避難通路の確保が最優先されなければならないにもかかわらず不十分な現状なのである。

また、例えば地下街のようなところでは通路が複雑で顧客にはわかりにくい場合もあるだろう。避難路や避難場所を従業員がふだんから知っておき、緊急時には的確に誘導しなければならない。指定避難場所の確認と各テナント同士の連絡ができていくかどうかも重要なポイントなのである。

2. 建物は大丈夫か

書店と一口に言ってもさまざまな立地がある。市街地の自社ビル、商業施設内のテナント、商店街やロードサイドに位置するものなど、その立地

によって防災対策は異なるだろう。しかし、いずれの場合でもまず建物の外観点検によって地震時の大崩壊などをまず防がなければならない。瞬間崩落の可能性がある場合には当然、補強・補修が必要となってくる。

また、ビルの上の階では揺れが激しく、バックヤードで作業をしている従業員が閉じ込められるような構造になっていないかも点検しておきたい。書店では薬品のような危険物があるわけではないが、ガスの配管はどうなっているのかなどは事前に知っておく必要があるだろう。

3. 棚と本が凶器になる

書店の最大の特徴は何といっても本の詰まった棚が店内狭しと並んでいることである。阪神・淡路大震災では書店の棚倒壊は想像を超えたものがあった。特に活断層と逆の向きに位置する棚の倒壊が顕著だったという書店の報告が実際にある。壁にぴったりついている棚が壁にはね飛ばされたり、天井まであった棚でもそのまま倒れてしまったのである。品揃えの観点から導入された高い棚も地震の際には凶器となることもありうるのである。

書店の場合、回転率のよくないケース入り上製本などが棚の最上段にあたりするが、当然のことではあるが棚は上部に重いものがあると倒れやすい。直下型地震の場合、逃げる間がまったくないことが今回の地震で判明した。だからこそ、棚固定の問題は書店での地震対策の最重要課題の一つだと私は思う。棚同士を相互に連結し、できればL字型やコの字状に横連結するなどの措置が必要であろう。また、安全を考えると過剰在庫は持たないようにすることなども検討材料の一つだろう。

4. ガラス・カーテン・敷物にも注意

高い棚が倒れた時に天井の蛍光灯が割れば当然、その破片は通路に落ちることになり、きわめて危険である。天井の蛍光灯は耐熱テープで固定し、ネットをつけるなどの対策も考えられよう。また、今回の地震ではビルの窓ガラスが割れて商店街の通路に落下した書店も実際にあったことから、大きなガラスには飛散防止フィルムをはるなどの措置も必要である。さらに、カーテンや敷物類は火災発生時に備えて不燃加工のものに変えておくほうがよいだろう。

5. 地震対策のハードとソフト

書店の地震対策は、ハード面もさることながらソフト面にも重きを置かなければ被害減少にはつながらない。つまり、必要最低限の避難道具、救急・医療用品、通信・情報機材を用意するだけでなく、地震防災マニュアルを作り、防災訓練もこれまでの火事だけでなくいろいろな局面を想定して実施しなければならないということである。とりわけ店舗では顧客の安全を最優先とし、緊急時の手順を店内で徹底化しておかなければならない。

作業を停止し、状況を把握し、救助・救急、保安措置を講じ、道路状況を把握して一般従業員を帰宅させるなど、一連の手順を取り決めマニュアル化しておくことが重要である。

また、今日では書店においても情報システムとしてのコンピュータの問題がある。重要プログラムやデータに関しては別地域に保管するなどの措置が必要であろう。

書店では今回の震災であわててマニュアルを作ったところ、未だにマニュアルを作っていないところに二極分解したが、顧客や従業員の安全に配慮しない書店には経営的な意味においても将来性はないと言わねばならないのである。

III 書店に求められる防災の思想

これまで書店では緊急連絡網さえないところがほとんどだったようである。それどころか今回の震災では従業員の安否情報も収集しない書店があったことはまさに驚きであった。しかし、少なくとも「阪神・淡路大震災」後は、このような対応では話になるまい。天災を避けることは不可能かもしれないが、被害を最小限に食い止めることはできるはずである。また、そのような努力をすることによってこそ、顧客と従業員の生命は守られるのである。いま書店に求められているのはまさに防災の思想ではないのだろうか。そのような視点からもう一度、私たちは書店現場を見直す必要があるように思えるのである。

(ゆあさ としひこ：書店トーク会事務局、(株)旭屋書店)

[NDC:024 BSH:1.書籍商 2.災害予防]